

日本英学史学会中国・四国支部

ニューズレター

No. 105

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

<エッセイ>

‘Ask what you can do for your country’

一年頭のご挨拶—

竹中龍範

明けましておめでとうございます。皆さまには清々しい新年をお迎えのことと存じます。本年も日本英学史学会中国・四国支部の活動にいつそうのご支援とご協力をお願い申し上げます。

昨年同時期に発行された本ニューズレターNo. 102において、本支部紀要『英學史論叢』が第25号という記念すべき節目を迎えることから、会員各位には「研究論考」は固より、「英学史随想」や「英学史時評」にも積極にご投稿くださるようお願いを申し上げたところです。しかし、残念ながら、同号を受け取られてその薄冊ぶりをご覧になられたとおり、収載されたものは「研究ノート」1本、「英学史随想」4本、「英学史時評」1本という寂しいものとなりました。コロナ禍のために、対面による研究発表や懇親会の場で互いに切磋琢磨し、励ましあうという雰囲気欠落してしまったことにその一因があるかとも思考するところですが、まずは会員一人ひとりが自ら日本英学史学会中国・四国支部の会員であることのアイデンティティを再認識していただき、支部に対してなにを求めるのか、と同時に、そのために自らは支部に対してなにができるのか、なすべきなのかを今一度お考えいただければと期待いたします次第です。

このようなことに考え及んだ際にいつも思い出されるのは、John F. Kennedyが大統領就任演説に織り込んだ‘my fellow Americans: ask not what your country can do for you — ask what you can do for your country’ (E. Knowles (ed.), *The Oxford Dictionary of Twentieth Century Quotations*, p. 169, Oxford Univ. Press, 1998)の一節です。個人的には機会あるごとに引用するところですが、一己の人間が国家という枠組みの中に存在するとき、その個人と国家との間にはいかなる関係が存するのか、これを対峙関係において見、個人に与えられた権利と義務とのあり様を慮ったものと考えられましょう。われわれの場合には、この‘country’を本支部と置き換えて、これを‘ask not only what your society can do for you, but also what you can do for your society’としてはいかがでしょうか。自らの意志に関わりなく或る国家の下に生まれついた個人とは異なり、己が意志によって入会手続きをとり、年度年度に会費を納めて会員たるの資格を有することには、そこに権利と義務とを持ち合わせるものが伴います。

わが中国・四国支部は、広島支部の時代より、一時期、支部活動が停滞した状態にありはしたものの、定期的な研究例会の開催、紀要『英學史會報』・『英學史論叢』の継続発行との基本方針を維持しております。これはまさに会員の皆さまが本支部の活動にお寄せ下さっているご支援の賜物と言うことができますが、現状の維持にとどまることなく、さらなる発展につないでいくことによって初めて将来展望が描けるのではないかと考えます。遠き慮りなければ必ず近き憂いありと申します。まずは『英學史論叢』の増ページにご協力いただければと願うところです。

(日本英学史学会中国・四国支部長)

<エッセイ>

老イルショックをこえて

上 杉 進



British Museum

マーク・トウェインの金言が気に入っている。曰く「人生二回論だ。年をとり、青春時代に帰り、そこから人生を再開。」すばらしい！余命が竿頭一寸ほどの短いものも、夢＝未来が生まれてくるではないか。小生は昭和 49 年（1974）British Museum にて、卒論の貴重な一冊、*Poems John Donne*（1572～1631）ケンブリッジ大卒に遭遇。感動で震えが止まらなかった。Couldn't be happier. 思わずつぶやく。

ヘンリー八世は英国史上、もっともスキャンダラスな王。キングス・コリッジの入口へ入り振り返るとヘンリー八世の 6 人の奥方の小さな像がある。6 回結婚した証である。このようなことでローマ・カソリックと不仲になり、八世は英国国教会を設立。Donne もローマ・カソリックから、アングリカンに宗旨替えをする。宗教的抑圧を受けたからだ。

彼のルーティンは、夜八時に出掛け、夜明け前に帰宅、その後、読書、詩作一恋愛（The Flea）、Holly Sonnets Death be not proud 等書く。サムエル・ジョンソンが形而上詩人と呼び、T・S エリオットが再評価、彼は思想を感覚で表現するという。奇想、機知、仕掛けで縦横無尽にえがく、英国ルネサンス期の逸材であった。Metaphysical Poets の先駆者であった。

マーク・トウェインの人生リコース論をよしとして、人生一回だからと自らを追いこまないでおおらかに参りましょう。

かつて「新人類」をいう語が流行したが小生は、自らを「新老人」を呼称。ダンを今一度読み返し、現代的意義を求めたい。

（日本英学史学会中国・四国支部 副支部長／IRT 代表）

令和4年度 第2回（通算86回）研究例会の報告

令和4年度第2回（通算第86回）支部研究例会をオンライン形式で開催しました。参加者は13名でした。

日 時： 2022年12月10日（土） 13:00 受付開始

方 法： オンライン会議システム Zoom による開催

開会行事（14:00～14:05） 支部長挨拶 竹中 龍範（元 香川大学）

研究発表(1)（14:05～15:15）

「明治期英語教科書独習書に見る『再読』：森修一の独案内を中心に」

馬本 勉（県立広島大学）

【発表を終えて】庄原出身の森修一が「ニューナショナル読本独案内」を著したのは、明治中期に庄原英学校が存立した時期に重なる。現代の教科書ガイドに相当し、各英単語に日本語の訳語を付す「独案内」では、一つの単語に複数の訳語を与える、漢文でいう「再読」に相当する訳読法が示されている。

本発表では、森の第一、第二読本独案内を対象に調査を行い、使役動詞（例：make「シテ | シムル」）、接続詞（例：if「モシモ | ナラバ」）、関係詞（例：who「其人ハ | 處ノ」）、及びその先行詞 He「彼レ | 彼レガ」）のように、1語に2つの訳語を与え、それぞれに異なる訳順数字を添えた例を分類し、特徴を論じた。漢学、蘭学の方法を踏襲したものと考えられるが、明治期の独習書はそれ以前のものに比べ、訳読の手順をより丁寧に記しているように思われる。ここから見えてくる当時の訳読法の解明をめざし、調査を継続していきたい。発表後には聴衆の皆様から様々なコメントを頂戴し、さらなる研究のヒントを与えていただいた。感謝申し上げたい。

参加者の感想

◇森修一の独案内にみられる「再読」について具体例を挙げて詳しく紹介いただき大変勉強になりました。今後、通時的考察（漢語やオランダ語学習における「再読」との比較）と共時的考察（森の「再読」法と他の独案内の編者たちの「再読」法との比較）等を楽しみにしております。

<E. Woodhouse>

◇当時の独習書を緻密に調査されていて、その研究手法も含め、とても参考になりました。再読の工夫が他の編纂者と異なる可能性が指摘されておりましたが、それらの継続調査も含めて、今後のご発表も楽しみにしております。なお、森修一の教材におけるカナ発音に付された「○」については、同時期に編纂された別の英学書（例えば、『単語独稽古：一名・教師いらす』や『正則 英語自在』[共に1886年刊]）にも見られたため、当時、編纂者間に何らかの共通の認識があったのかどうかについて、少し興味がわきました。<ポレポレ>

◇独案内の研究の無限の可能性を感じました。次回発表も楽しみにしております。<YH>

「英語語彙の多面的学習」

松岡 博信 (安田女子大学)

【発表を終えて】語彙は多面的、言い換えれば立体的に学習すべきというのが私の持論であり、その意味で今回発表の機会を与えられて準備する過程で、語彙学習に関する先行研究から様々な示唆を得られたことは大きな収穫であった。一方、当初本発表では、語源・同意語・反意語・品詞転換・連語・句動詞・外来語および品詞分析を活用した語彙指導の歴史的事例を取り上げる予定であったが、主に「形態素」を活用した語彙学習を中心に論じるに留まり、タイトルの「多面的学習」を十分に論じることができなかった。この点は今後の課題とし、次回発表する機会があれば、さらに多くの視点から考察した包括的な語彙学習に関する理論を示したい。また、準備時間が足らず、歴史的事例に十分触れることができなかったことも反省点である。これからも、日本人英語学習者の語彙習得が何故 Vocabulary を増やすことも、その記憶を長年に渡って維持することができないのかについて、その原因と解決策を探り、より良い英語語彙指導に向けた方策を追求して行きたい。

参加者の感想

◇「英語語彙の多面的学習」ということで、「語源・同意語・反意語・品詞転換・連語・句動詞・外来語および品詞分析を活用した語彙指導の歴史的事例」をご紹介いただき大変参考になりました。ただ、その語彙指導を中学校・高等学校・大学の現場でどう活かすのかという具体的方法が必ずしも明確ではなかったような気がいたします。次回のご発表では、特に中高生にとって効果的な語彙学習のモデルケースをご提示いただけたらと思っております。＜E. Woodhouse＞

◇語源を用いた語彙学習法は明治時代で既に取り入れられていた方法の一つで、それが現代まで継続しているのは、やはり効果的な学習法であるとの認識が定着しているからだと改めて感じました。ただ、一口に語源学習法と言っても、語の構成要素である接辞に注目する場合や、語の成り立ちそのものを歴史的な観点から注目する場合など、さまざまな「語源」を改めて理解することができ、とても興味深く拝聴することができてよかったです。＜ポレポレ＞

◇語彙指導の内容を整理して頂いたようで面白かったです。大変、勉強になりました。＜YH＞

◇第二言語習得研究の成果は経験則を裏付けるタイプのものが多い、という印象を持っているが、「反復」は語彙習得にあまりプラスではないことが示唆された先行研究に興味を抱いた。伝統的な学習方法は、効果が有るのか無いのか（有ったのか無かったのか）、SLAの研究手法が明らかにしてくれる可能性を感じた。このことは、英学史研究に新たな光を当ててくれるかもしれない。古いものと新しいものの融合が、ここにもありそうだと思う。＜Horse＞

閉会行事 (16:45~16:50) 副支部長挨拶 馬本 勉 (県立広島大学)
懇 親 会 (17:30~19:00) オンラインで開催 (参加者 7 名)

例会全体について

◇オンライン例会はすでに定着したように思います。緻密な会の運営、ありがとうございました。ただ、休憩時等に個人的な世間話がしにくいので、ハイフレックス併用でも構いませんが、やはり対面の復活を望みます。＜YH＞

◇コロナ禍の3年間で、研究例会のあり方が大きく変わりました。対面と同時配信（ハイフレックス）を行った回を含め、5回の例会がオンラインで行われ、それが出席者増に結びつく要因ともなりました。そろそろ出口の見え始めた今、よりよい例会を模索し続けたいと思います。＜Horse＞

『英學史論叢』第26号原稿募集

日本英学史学会中国・四国支部研究紀要『英學史論叢』第26号（2023年5月発行予定）の投稿論文を募集します。研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

原稿提出締切 2023年2月20日（消印有効）

- ・投稿に際しては、次の「執筆要領」および「標準書式」に従ってください。
- ・標準書式にそったテンプレートファイルをご希望の方は、事務局までお知らせください。

『英學史論叢』執筆要領

1. 『英學史論叢』に載録するものは研究論考・研究ノートおよびその他のものとする。いずれも未発表のものに限る。
2. 研究論考・研究ノート、その他のものとも、標準書式に従った完全原稿をパソコン等を用いて作成し、プリントアウトして提出するものとする。執筆者による校正は行わない。
3. 研究論考・研究ノートは日本英学史学会中国・四国支部研究例会、日本英学史学会本部月例会および全国大会、ならびに他支部研究例会における口頭発表をまとめたものとする。これによらない投稿論文も受理することがある。いずれも正副3通を提出するものとし、正本1部には執筆者名を明記し、副本2部には執筆者名を伏せる。
4. 研究論考・研究ノートは参考文献・資料・図版等を含め、10ページ以内とする。
5. 掲載決定後の最終原稿は、修正を求められている場合はそれに対応した上で、プリントアウトしたもの及びデジタルデータを提出する。原稿は提出されたものをそのまま印刷するものとし、したがって、執筆者による校正は行わない。
6. 研究論考・研究ノートの掲載料は1編につき3,000円とする。ページ数を超過した場合は、1ページにつき1,000円の追加掲載料を負担するものとする。学生会員については、規定ページ数以内の場合は掲載料を免除する。但し、ページ数超過の場合は、超過分について1ページ当たり1,000円を負担する。
7. その他のものについては、英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等とする。これについては会員の投稿 および編集委員会の執筆依頼によるものとし、いずれも原則として2ページ以内とする。なお、新刊書評・紹介は日本英学史学会中国・四国支部会員の著書ならびに中国・四国支部の活動に関わる著作を取り上げるものとする。

『英學史論叢』標準書式

1. 用紙はB5判白紙を用い、上部および下部に25mm、左右に20mm、それぞれ余白をとる。
2. 本文は、10.5ポイント文字を使用し、1行あたり38文字、1ページ38行の書式によって作成する。フォントは、和文は明朝体、欧文はCenturyを用いる。和文中の読点は「、」（全角コンマ）とし、和文・欧文を問わず、英字・数字はすべて半角文字とする。
3. 本文第1ページに論文タイトル、執筆者名を記す。論文タイトルは18～22ポイント文字を使用し、中央に置く。執筆者名は本文と同じ大きさの文字を用いて、右に寄せて記す。第1ページには、タイトル、執筆者名に続いて、30行を本文（見出しを含む）にあてる。なお、最終原稿の論文末に、右に寄せて、執筆者の所属をカッコに入れて示すこととする。
4. 本文中の見出しについては前節との間を1行アキとし、番号を付してゴシック体とする。但し、見出し中に欧文が含まれる場合にはそのフォントをArialとする。
5. 注は、尾注とし、本文中に右肩数字によって注のあることを明記する。
6. 参考文献は論文末に一括して示す。

英学史情報広場

◇保坂芳男「下関商業学校の英語教育：その充実までの過程を辿って」『英学史研究』55, 49-68.

中国・四国支部からのお知らせ

◇年会費の納入について御礼とお願い

今年度会費（一般 3,000 円，学生 2,000 円）を納入いただきありがとうございます。これからご納入の方は、次の通りお手続きくださいますよう、どうぞよろしくお願いいたします。
（振込手数料は各自でご負担くださいますようお願いいたします。）

ゆうちょ銀行「振替払込用紙」を用いる場合 （口座番号） 0 1 3 6 0 - 9 - 4 3 8 7 7 （加入者名称） 日本英学史学会中国・四国支部 ゆうちょ銀行へ他の金融機関から振込む場合 （店 名） 一三九（イサノキョウ）店（139） （口座番号） 当座 0 0 4 3 8 7 7 （加入者名称） 日本英学史学会中国・四国支部
--

◇2023 年度の研究例会（日程は予定）発表者を募集します。事務局までお申し込みください。

第 1 回 2023 年 5 月 27 日（第 4 土曜日） 申込期間 2023 年 2 月 27 日～3 月 27 日
広島市内の会場において、対面とオンラインの同時配信（ハイフレックス）を予定

第 2 回 2023 年 12 月 9 日（第 2 土曜日） 申込期間 2023 年 9 月 9 日～10 月 9 日
広島地区以外の会場において、対面とオンラインの同時配信（ハイフレックス）を予定

日本英学史学会中国・四国支部ニューズレター No.105 2023 年 1 月 31 日発行

発 行 日本英学史学会中国・四国支部（代表 竹中 龍範）
事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 5562 県立広島大学 馬本研究室内
電話: 0824-74-1725（研究室直通）
e-mail: eigaku@tom.edisc.jp
ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>
郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部